

083

contents

常設展

「雲谷等益-寛永期の雪舟流-」展

年間スケジュール



天花

TENGE

常設展

第2常設展示室

「山口県の仏教美術から」

2/5 tue ~ 4/7 sun



表紙作品解説

木造十一面観音菩薩立像 鎌倉時代 1193年 像高167.3cm
山陽町・正法寺蔵(山口県指定文化財)

この木像は、針葉樹材(おそらくカヤ)の一材で、像の頭と体の部分を彫り出して、内側をくりぬき、両側面や腕、背面などに材を継ぎ足して造られています。彩色は顔以外にはほとんどありません。この像の背面の材の裏側には銘文があり、建久四年(1193)に松嶽寺(今の山口県厚狭郡山陽町、正法寺)本尊として作られたことがわかります。銘文には数十人の名前と寄進料が記され、多くの人がこの像を造るために費用を出し合っていることがわかります。制作者の名前はわかりませんが、おそらく地元在住の仏師が制作したのでしょう。

年記から鎌倉時代初期の作とわかりますが、丸い顔立ちや、プローションなどは、平安時代後期の雰囲気をとどめています。一方で、きりっとした目鼻立ちなど、新しい時代の要素も見られます。平安時代から鎌倉時代へと移り変わる時期の様式を示す基準的な作例となる仏像です。

(岩井)

小林和作室

「松田正平」 1/16~4/7

宇部市出身の松田正平(1913~)は、戦前のフランス留学で油彩画を学び、帰国後は国画会を中心に活動を続け1984年には第16回日本芸術大賞を受賞。現在も、わが国洋画壇の最長期的存在として制作を続けています。円熟した画境の深まりを見せる「周防灘シリーズ」など、透明感のあるマチエールと飄逸味や詩情を醸し出す独自のフォルムをご堪能ください。



松田正平「周防灘(祝島)」 山口県立美術館

香月泰男室

「シベリア・シリーズII」 1/16~4/7

三隅町出身の香月泰男(1911~74)は、シベリア抑留を経験し、復員後その重い体験を「シベリア・シリーズ」として描きこしました。当館常設展示では、同シリーズを抑留体験の順を追って紹介しています。今回はシリーズ全57点の中から、抑留から帰国・回想までをモチーフにした作品をセレクトして展示します。



香月泰男「私(マホルカ)」 山口県立美術館

郷土工芸室

「古萩と置物」 1/16~4/7

資料展示室

「荒木経惟」 1/16~2/24

「…『センチメンタルな旅』は私の愛であり写真家決心なのです。自分の新婚旅行を撮影したから真実写真だぞ!とっているわけではありません。写真家としての出発を愛にし、たまたま私小説からはじまったにすぎないのです。…」
荒木経惟(1938~)がこのように宣言した写真集『センチメンタルな旅』(1971年)から、当館所蔵の20点を紹介します。



荒木経惟「センチメンタルな旅」 山口県立美術館

「牛腸茂雄」 2/26~4/7

雲谷等益

— 寛永期の雪舟流 —
Unkoku Toeki and followers of Sesshu in the first half of the 17th century

2001年12月18日(火)
→ 2002年1月27日(日)

休館日: 12/25・12/28-1/3・1/7・1/15・1/21
開館時間: 9:00 → 17:00 (入館は16:30まで)

料金: 一般 730(620)円・学生 510(410)円
(内は20名以上の団体料金 18歳以下と70歳以上、高等学校・専門学校に在籍される方は無料)

【主催】山口県立美術館 【後援】文化庁 【企画協力】雪舟研究会



几帳面に描かれた建物

瓢箪のハンコ

繰り返しひかれたタテ・ヨコの線

枝のジグザグが奏でるリズム

「これでもか!」と重なる遠くの山並み

金の霞の微妙な輝き

きれいな青色

意外とかわいい登場人物

広い薄墨の面の肌合い

雲谷等益筆「瀟湘八景圖屏風」(六曲一双のうち右隻、山口県立美術館)

Unkoku Toeki and followers of Sesshu in the first half of the 17th century

雲 谷等益(うんこく・とうえき、1591～1644)は、江戸時代初期に活動した萩藩の御用絵師です。自信満々「雪舟四代」と署名した彼は、現在、全然有名な画家ではありません。古美術に少し詳しいひとでも、「《雲谷等なんとか》のひとり」くらいにしかならないう認識してないのではないのでしょうか。雲谷派初代の等顔でも、桃山時代の巨匠として知名度が上がってきたという程度なのですから、その息子等益があまり注目されてこなかったのも、仕方ないことなのかもしれません。

かくいう私も、まじめに等益を見たのは、この美術館に就職してからのことです。しかし、一見して驚きました。等顔よりも繊細で巧くて切れ味が鋭い。細部まできちりと整っていて、色合いも美しくて上品です。それでいて、弱々しくはなくキリッとしていて格調が高い。私はいつの間にか、描かれた樹木や岩々の「リズム」に酔っていました。「等顔の後継ぎで、ちょっと

おとなしい」というのが定評の等益を、真正面からちゃんと評価してやりたいと思うようになりました。そこで、私は等益で展覧会をできないかと勉強を始めました。なにしろ地元の画家で、遺作も文献資料もたくさんあります。唯一、絵の制作年代(作品同士の前後関係)がわからなかったのですが、落款から大雑把に時期を分けられることがわかってきました。

やがて私は、等益を考える場合に何よりも大切なのは雪舟への傾倒の深さではないかと考えるに至りました。ここまで自己流に描いて、なおかつ、ここまで雪舟に近接できた画家は、歴史上、等益以外にはいません。等益と同時代には、徳川幕府の奥絵師、狩野探幽も雪舟を慕って瀟洒な画風を築きつつありました。長谷川左近(等重)という人が「自雪舟六代」を名乗ったのも、寛永年間のことで、どうやらこの時期、「雪舟ブーム」が起っていたようです。そんな時代背景の

中で、等益のかっちりした山水画はひときわ目立つ存在で、それは、「山水長巻」に基礎をおく等益の雪舟解釈が独特なものだったことによるようです。

等益の作品からは、几帳面さや真面目さといったようなものが、凄味や気品と

なっていてにじみ出てきています。それでいて、ときおり見せる肩の力のぬけた表現に、にんまりさせられてしまうわけで、なかなかあなどれません。展覧会では、筆の動きを追いつつ、細部までじっくりご覧いただきたいと思います。

(綿田)

雲谷等益展記念講演会 + 雪舟研究会シンポジウム

2002年1月5日(土) 美術館講座室にて 参加無料

講演会「雲谷派の興亡」 13:00～14:00

【講師】山本 英男氏(京都国立博物館学芸課美術室長)

シンポジウム「雪舟はどのように受容されてきたか」 14:30～16:00

【ゲスト】山本 英男氏(講師)

【パネリスト】影山 純夫氏(神戸大学 国際文化学部教授)

山下 裕二氏(明治学院大学 文学部教授)・綿田 稔(当館学芸員)

【コーディネーター】島尾 新氏(東京文化財研究所美術部広領域研究室長)

講演会では、雲谷派研究の第一人者である山本氏に、初代等顔から幕末にいたるまでの雲谷派の流れについてお話しいただきます。シンポジウムでは、日本人と雪舟との関わりを簡単に振り返りながら、雪舟没後500年(2002年あるいは2006年)を迎えようとしている私たちの歴史的位置を見つめ直すことを試みます。

傍聴希望者は往復はがきに氏名・住所・電話番号(複数応募の場合、代表者の氏名・住所・電話番号と人数)を記入の上、山口県立美術館「雪舟研究会」事務局までお申し込みください。先着順で定員70名にいたり次第、締め切らせていただきます。

学芸員によるギャラリートツアー

12月23日・1月13日・1月27日(いずれも日曜) 14:00～



雲谷等益筆「雪舟等揚像」(部分、常栄寺)

2001-2002

schedule

山口県立美術館 平成13年度年間スケジュール

常設展

特別展



4/17 生誕90年記念 香月泰男
「シベリア・シリーズ」全作品展

6/10 雪舟 11/4 柳沢信
12/9
12/11 中平卓馬

小林和作 現代の萩焼
シベリア・シリーズ I

1/14 松田正平 2/5 荒木経性
1/16 古萩と置物 2/24
シベリア・シリーズ II 山口の 2/26 仏教美術から 牛腸茂雄

4/7

Information

■休館日
毎週月曜および年末年始(12月28日~1月3日)
ただし、4月30日(月)、12月24日(月)、1月14日(月)
は開館、12月25日(火)、1月15日(火)は休館

■開館時間
9:00~17:00(入館は16:30まで)

■料金
常設展: 一般190(160)円 学生120(100)円
()内は20名以上の団体料金
特別展: 別途に定めた料金
常設展・特別展ともに18歳以下と70歳以上および高等
学校、盲・聾・養護学校に在学する方等は無料。
教育文化週間11月1日~11月7日は全ての方が無料。

